

## 土佐藩と材木市

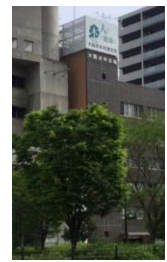
大阪市立中央図書館には地下鉄の難波で乗り換え、西長堀まで行くことが多い。なんだか味気ないので、たまに心齋橋で降りて、長堀通を歩くことがある。写真は長堀通の白髪橋交差点にある「大阪木材市売市場発祥の地」。いつもは通り過ぎていたが、たまたま見つけた。なぜ、木材市場なのか。ふと見上げると、「大阪木材会館」というビルが目にとまった。石碑には、「元和末年(1622)の頃土佐藩の申請によって材木市が立売堀川で始まり、やがて土佐藩が蔵屋敷を白髪町にかまえると西長堀川でも材木市が許可される事になった」と書かれていた。なんだか土佐藩と材木市に興味をもった。

4月から大阪市立大図書館を利用するようになり、地下鉄「あびこ駅」まで35分の、すこし長い乗車となる。『大阪を古地図で歩く本』を車内で読んでいると、標題についても書かれていたので、抜粋して紹介しておきたい。

江戸時代には、全国各藩の蔵屋敷が大坂に置かれていた。これは藩でとれた米や特産物を集積し、天下の台所たる大坂で売りさばくため、当時の物流の中心が水運だったことから、蔵屋敷は中之島や堂島などの川沿いに集中し、なかでも中之島には40軒を超えるほどの蔵屋敷が集中して軒を連ねていた。

ところが不思議なことに、土佐藩の蔵屋敷だけは中之島から1キロメートルほど南へ離れた長堀川沿いの立売堀に置かれていた。いったいどんな理由があったのだろうか。これは、江戸時代初期に、大坂で膨大な量の材木が必要とされていたことに端を発している。慶長20年(1615)、豊臣家の滅亡と同時に大坂城は焼失し、城下町までが壊滅状態となった。それを再建するため、各所で大規模な建築工事が行われることになったのだが、これを商機と見た土佐藩は、幕府の許可を得て材木市場を開いた。そして、土佐で伐採した材木を大坂に送り込んでセリに出し、さかんに売買をした。

この材木市場が置かれたのが立売堀であったため、土佐藩は蔵屋敷を市場に近い長堀川沿いに置いたのである。長堀川には、かつて「白髪橋」という橋が架かっており、後世にも長堀通り沿いの地名として残ったが、この名は高知の白髪山で伐採された材木が大量に運ばれてきたことにちなんでいるという。また、同じく地名として残った「鯉座橋」は、土佐の鯉節商人がこの周辺に集まっていたことから名づけられたという。



(2018年5月6日)